

研究室紹介

富山県農林水産総合技術センター 農業研究所 病理昆虫課

富山県は、飛騨山脈などの山々から流れ込む、いくつもの大河川の扇状地が、主要な農耕地です。古くは水害と闘いながらも、治水や基盤整備がすすめられ、水資源に恵まれた水田地帯が形成されました。水田率は95.5%（全国1位）で、水稻に特化した農業構造となっています。美しい田園風景が広がる地域ですが、コメの消費、価格が低迷していく中、水稻を中心としつつも、畑作、園芸を組入れた水田農業のありようが問われており、当センターの技術開発もこれに呼応したものとなっています。

病理昆虫課のスタッフは、病害担当2名、虫害担当1名、予察担当2名の計5名で、試験研究と病害虫防除所の業務を行っています。その担当分野は多岐にわたりますが、園芸研究所と密接に連携しながら、それら課題に取り組んでいます。以下、研究部門の主要な研究課題とその背景・ねらいを紹介します。

「水稻の健全種子生産技術の開発」

本県は国内の種糶受託生産量の約60%を占める主要な種糶生産県であり、かねてより種子伝染性病害の防除技術の高度化に取り組んでいます。産地では40品種以上の種糶が栽培されており、多様な品種（ロット）の用途・生産量、病害発生リスクに応じた防除メニューの最適化が必要な状況です。

「斑点米カメムシ類の広域的な管理技術の開発」

カメムシ類による斑点米がしばしば問題になります。これまでの研究により、個別の対策技術は整いましたが、地域の発生リスクに応じた意思決定の仕組みづくりが今後の課題となっています。また、抵抗性品種育成のための基礎的な研究にも取り組んでいるところです。

「殺菌剤耐性菌の対策」

様々な病害について耐性菌のモニタリング調査を行っており、近年では、ナシ黒星病、ブドウべと病、ダイズ紫斑病等を対象に実施しました。なお、イネいもち病のQoI耐性菌の発生は未確認ですが、県外からの持込み防止やガイドラインの遵守等、未然の発生防止策を重視しています。

「園芸微小害虫の管理技術の開発」

ネギアザミウマではネオニコチノイド剤に抵抗性の個



子供たちを招いての科学教室（昆虫の観察）

体群が発生しており、防除体系の見直しを急いでいます。また、ニセナシサビダニの被害が顕在化してきており、早急な発生状況の把握と対応策の策定が必要となっています。

「水田転換畑における土壌伝染性病害対策」

水田圃場は構造的に排水が不良なため、これを好む土壌病害が大きな問題になります。ダイズは省力・低コストが技術開発の出発点にあることから、黒根腐病の防除対策は栽培管理技術の改変による被害の回避を、さらに、タマネギべと病も含め、各種土壌病害の発生履歴や土壌診断の結果をデータベース化し、発生リスクに応じた土地利用を地域全体で考えていく仕組みを構築したいと考えています。

かつての水稻単作地帯は、今や様々な品目を組み入れた水田農業を標榜しており、水稻も有機、減農薬、飼料用、加工用、様々な直播栽培等「多様なイネ栽培」が広がっています。これら多様な価値観に対応するには、専門性にとらわれない高い課題解決能力が求められています。また、従前の問題解決型の研究ばかりではなく、正しく将来予測し、未然に被害を防ぐための計画立案が必要だと考えられます。

（現 企画管理部 守川俊幸）